

『近江源氏先陣館』

解説

本作は近松半二を中心にした浄瑠璃作者数名による合作で、明和6年（1769）12月に大坂竹本座において全九段の人形浄瑠璃作品として初演された。歌舞伎ではその翌年5月大坂中の芝居で初代三枘大五郎らによって初演されている。作品のモチーフとなっているのは徳川と豊臣が闘争した〈大坂の陣〉。徳川家康が豊臣家を滅亡に追いやったこの戦いにまつわる様々な事柄は徳川期の民衆には大きな関心事であり、『難波戦記』『大坂軍記』などの書物、あるいは講釈などから様々な芸能作品が生まれ、本作はその集大成的作品とも言える。

題材となる世界は、近世期の劇作の常套として実際を避けて鎌倉期に仮託してあり、すなわち徳川家康は北條時政〈鎌倉方〉、豊臣秀頼は源頼家〈京方〉として対立の構図が描かれ、劇中の近江坂本城は大坂城を暗示している。この近江を舞台に兄弟別れて戦う近江源氏の佐々木盛綱・高綱兄弟は、〈大坂夏の陣〉で敵対した信州真田家の信幸と信繁（幸村）の兄弟に宛てられている。

この兄弟の兄・盛綱が主役となるのが八段目「盛綱陣屋」で、作中最も上演頻度が高い場である。ここには登場しない弟・高綱の偽首のトリックを受けて、盛綱が甥の小四郎の自害を目の当たりにし、自軍の大將・時政を裏切るに至る。全般に作者・近松半二の綿密な技巧が配されている作品だか、特にこの場は盛綱はじめ皆が取る行動と心理と、その伏線が回収されていく劇展開に推理劇の魅力がある。この作劇法もさることながら、やはり主題となるのは、武士の忠義心よりも血縁への情を優先させた盛綱の決断である。命懸けで父・高綱の策略を全うさせようとした小四郎の健気さに打たれ、盛綱は自らも死を覚悟して弟を助ける。この忠義の孫に死を強要しなければならない微妙も老け役中の難役であり、「本朝廿四孝」の越路、「菅原伝授手習鑑」の覚寿とともに〈三婆〉と称されている。

盛綱役の大きな見せ所はやはり首実検。偽首を敢えて弟のそれと断じるまでの間は言葉を発さず、わずかな表情の変化だけで心理を描写する肚の芸が要求される。近代では初代中村鴈治郎、十五代目市村羽左衛門、初代中村吉右衛門らの名演が知られるところ。このうち吉右衛門、すなわち播磨屋の芸系は昨年（令和3年）惜しまれて没した二代目中村吉右衛門に継承され、義太夫狂言の今日的価値を存分に知らしめた。近年、取り分け義父吉右衛門の芸継承に鋭意し、芸域を広げている菊之助が初役の盛綱に挑む。

あらすじ

源頼朝の歿後、その跡目を巡って鎌倉方(実朝)と京方(頼家)との間に戦が起こった。数に勝る鎌倉方の総大将北条時政が、頼家の籠もる近江坂本城を攻め立てているが、京方の知将佐々木高綱が策謀を駆使して抵抗している。一方、高綱の兄・盛綱は鎌倉方に与しており、兄弟が敵味方に分かれ争う成り行き。両軍の睨み合いが続く中、高綱の一子小四郎が幼い身で出陣するが、盛綱の子である初陣の小三郎に生け捕りにされた。

ここは近江国にある盛綱の陣屋。ここへ京方の侍大将和田兵衛秀盛がわずかな手勢だけを連れて乗り込んできた。目的は虜となっている小四郎の返還である。和田兵衛は自らの首と引き換えに小四郎を返せと求めるが、盛綱はその要求を拒む。和田兵衛は「時政に直談判する」と、大胆にも時政の居る石山の陣所へ向かっていった。

和田兵衛を見送った盛綱は、密かに母の微妙を呼び、声を潜めて甥の小四郎を手にかけてくれるよう頼んだ。驚く微妙にその理由を説く盛綱。そこには弟高綱へかける情があった。老獪な時政は小四郎を人質に取って高綱を味方に取り込もうとしている。その策略にみすみす乗る弟とも思えないが、子故に迷って不忠な行動をとらないとも限らない。小四郎が腹を切れば、弟の忠も立ち、自ら義も立つ。微妙は一族が敵味方となって争う因果を嘆きながらも、孫に腹を切らせる辛い役目を負うことを承知する。

その夜、陣屋に一本の矢文が打ち込まれる。軍兵姿に身をやつして忍び来た高綱の妻篝火が、我が子小四郎の身を案じて放ったものであった。その矢文に気がついた盛綱の妻早瀬は、「時節を待て」と軽率な振る舞いを戒める矢文を射返した。しかし母が来ていると感づいた小四郎が「顔みたや」と縄目のまま表へ飛び出そうとした。それを止める微妙が持つ広蓋には死装束と腹切刀が載せられていた。初めて会う孫に死を迫らねばならない辛さ。微妙が父の武勇のためにと泣きながら説得すると、小四郎も命を捨てる覚悟を健気に示すが、もう一度だけ「父母に会いたい」と願う。しかし可愛い孫のその望みを聞き入れることは出来なかった。孫と死を共にする覚悟の微妙は、心を鬼にして「尋常に死んでたも」と刃を向けるが、小四郎は祖母の刃を避け、母のもとへ逃げようとする。その哀れな命惜しみに気後れした微妙は、嗚咽しながら「自害してくれ」と手を合わすしかなかった。

俄に陣太鼓が聞こえてきた。騒ぎに乗じて小四郎を取り戻そうとする篝火を、必死に止める早瀬。そこに現れた盛綱は大音声で小三郎を呼び出すと、敵陣の様子を窺いに一子を走らせる。それと入れ替わりに、信楽太郎と伊吹藤太が次々と戦場の様子を注進に現れた。高綱は小四郎を奪還しようと時政へ凄まじい一騎駈けをしたが、敢え無く討ち取られたという。やはり弟は子故の闇に心がくらみ、時政の策略に落ちたかと盛綱は齒噛みする。微妙は高綱の回向のため小四郎を連れて仏間に入る。

「時政公のお入り」。美々しく拵えをした時政が小三郎や近習達を従え、悠然と陣屋に現れた。さきほど討ち取った高綱の首の真偽を、兄である盛綱に見極めさせようというのであった。泰然とする時政は、和田兵衛が源氏の白旗を奪い逃げ去ったという竹下孫八の知らせにも動じることはなく、盛綱に首実検を迫る。気を鎮めて首桶に手をかける盛綱。その首桶が開けられるや否や、小四郎が奥から飛び出してきて、すぐさま刀を腹に突き立てた。しかし「父様」と首に向かって叫ぶ小四郎の言葉とは裏腹に、盛綱が首をとくと確かめれば、そこにあるのは明らかに偽首であった。弟の浅はかな計略と嘆息する盛綱の目に、何かを訴えるような小四郎の姿が入った。父の首でないとわかるはずの甥の不審な自刃……。弟のある計略に気がついた盛綱は、覚悟を決めて「弟高綱が首に相違ござりませぬ」と偽りを言い切った。満足した時政は褒美の鎧櫃を盛綱に与え、本陣に帰っていった。

時政の姿が見えなくなると、盛綱は門外に潜む篝火に「計略の偽首しおおせた」と声をかけ、小四郎との最期の対面を許した。篝火は、我が子が父からの言い付けを果たせるか見届けるためにやってきたのであった。全ては最初から高綱によって仕組まれた計略だった。時政を油断させるには、高綱が死んだと思わせる事が肝要。そのためには小四郎がわざと敵の虜となり、偽首を前に切腹し、時政に首が高綱のものだと信じこませなければならなかった。盛綱はすぐに偽首と気がついたが、幼子の健気さに心打たれ、甥を犬死にさせることはできなかった。負うた子に教えられる忠義心、盛綱も命懸けで時政に刃向かったのであった。

盛綱は皆々に「褒めてやれ」と称賛を促し、甥の孝行を称える。それと知らず忠義の孫に辛く当たった微妙の後悔は深い。そして母篝火もすべて承知の上のことながら、涙ひとつ見せず勇んで発っていった我ががいじらしい。抱きしめて「父の忠義は立った」と褒める母の言葉に、小四郎は嬉しそうに肯いた。その小四郎のただ一つの心残りは父に逢えなかったこと。それを声にすることが出来ずに、幼子は小さな命を散らせた。皆の涙はとどまることがなかった。

小四郎の死を見届けた盛綱は、自らも鎌倉への申し訳と腹を切ろうとする。しかしそれを奥で様子を窺っていた和田兵衛に制せられる。その和田兵衛が傍らの鎧櫃を鉄砲で撃つと、中から時政の隠し目付の榛谷十郎が飛び出てきた。やはり猜疑心の強い時政は、盛綱をも疑っていたのであった。和田兵衛は、いまここで盛綱が死んだら高綱の計略が無駄になると短慮を戒める。敵将に教えられる忠と義の立て様。時政の陣所から奪ってきた源氏の白旗を手にする和田兵衛に「曲者返せ」と表向きは敵意を見せながらも、心の内で奉謝を示す盛綱。幼子を悼む女たちの落涙の中、盛綱と和田兵衛は後日の再会を約束して別れ行くのであった。

(鈴木英一)